

大衆文学大系

群司次郎正

片岡鐵兵

濱本浩

北村小松

藤澤桓夫

監修 大佛次郎 川口松太郎 木村毅

講談社

大衆文学大系

23

群司次郎正
片岡鐵兵
濱本浩
北村小松
藤澤桓夫

大衆文学大系 23

群司次郎正
片岡 鐵兵
濱本 浩
北村小松

藤澤桓夫 集

昭和四十八年三月二十日 第一刷

著者 群司次郎正 濱本 浩
片岡 鐵兵 北村小松

藤澤桓夫

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁十二番一 郵便番号 一一二
電話東京 (〇三) 九四五一一二二 (大代表) 振替東京 三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 三四〇〇円

◎郡司ちよ 林 藍子 濱本澄夫 北村未知子 藤澤桓夫
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

目次

群司次郎正集

侍ニッポン

七

片岡鐵兵集

生ける人形

二三

朱と緑

二五

濱本浩集

浅草の灯

二七

続浅草の灯

三三

十二階下の少年達

三三

軍 鶏

四〇一

土佐のカルメン

四二六

手

四三六

海 援 隊

四四六

北村小松集

肥料と花

四四二

港 街

五五

燃ゆる大空

五〇

藤澤桓夫集

新 雪

五五

解説

五五

解題

五三

年譜

五〇

群司次郎正集

侍ニッポン

一

時、安政三年花の三月。

一世の大政治家井伊掃部頭直弼は、麻のようにかき乱れた徳川二百五十年の最後のあがきの風雲にのつて、じやまものはかたっぱしからなぎ払ってけんけんごうごうの世論を押しつぶし、大老職を奉じて、自己の専断政治によつて、天下を統一しようとしていた。

この機運の中で新思想尊王攘夷をふりかざして立つ志士が、^{ばい}蠱菌のようにばびこつていた。こうして、日本全土に血の雨が降り、でも、自然はおごそかに春をつちかっていた。

江戸は春ににぎわう。春は花が咲くが、江戸の花は人の心を

魂の底からかき乱さずにはおかぬという。門前の桜、俗に本願寺の桜を門前の八重桜といい、築地の本願寺というより江戸の本願寺といったほうがよいほど、そこは江戸の名所、また、八重桜がにしき絵のかすみのように遠くすそを引いてたなびいていた。

今の柳橋一带は、昔は全盛の地であつた。その柳暗花明のちまたが、大名諸公の秘密の遊び場とされていた。水戸藩の軍学者、山国兵部が尊王の同志と遊びにかこつけて、ここで密議をこらしておつた。山国兵部は、世に擬装の面をかぶるための所業か？ この二、三日ついつづけの遊蕩ぶり、警護の役にはべつた水戸家の家来たちもあくびに息を抜きながら、囲碁や将棋に打ち興じておつたが、視察という大任をもっている野村常之介はぶらりと待合「金竜」の勝手口を出て、隅田川のほとりをそぞろあるきに春のたそがれを楽しんだ。

桜で名題の本願寺！ せっかく、江戸へ来てここに参拝せぬのも話の種にならぬこと、自分の水戸へ呼びもどされる日も近づいていることとて、きょうはゆつくり見物かたがたと、かれは原っぱの中を春がすみの空をながめながら、朗らかな気持ちで歩いていった。

祝橋の手前、すなわち今の歌舞伎座跡、昔は野相撲の土俵があり、相撲があるたびに大道店が軒を並べて、ことのほかにぎわっていた。

キセルのつけねを売る店の前に立つて、野村は、

「たいそうなにぎわいじゃが、あの黒山の人出はなんじゃ？」と、あたりに目をくばって尋ねた。

「お武家さま、め組のけんかがここに陣を張ってから、ここで野相撲などの集まりはご法度になりまして、せっかくの本願寺のご永代経の人出も、わたしたち小商人にはなんの役にもなり

ませんでした。が、本年のご永代経には野相撲も許され、わたしたちもたいへんな景気です。これで、この辺に夜鷹やつじ切りも、こうにぎわえば、あとを絶つてござんしょう」

「ほう、この辺につじ切りや夜鷹のたぐいが出没するか？」

「いや、もう、名物でござんす」

「きょうはご永代経とみえるな」

「そうでございます。本願寺は参詣人でたいへんなものでございます」

「ふむ、わしもさいわいな日にもうでたものじゃな」

野村は青々と茂ったアシの原の築地一带をながめながら、ボーンと鳴る本願寺の鐘と壮大な御堂を前に見て、ぼつぼつと帰ってくる参詣人とすれ違いながら進んでいった。

夕がたである。カラスがバタバタと飛んで、海のおいがした。

本願寺は、春秋二度の参詣日があった。秋にあるのは報恩講といって一般人の参拝日、春の永代経は檀家の参詣日、本願寺の檀家は公卿か、あとはたいいてい武家、その他、町人ではゆいしよのある階級なので、春の永代経の参詣人は武家と皆ゆいしよのある町人でにぎわっていた。これを見込んで、おこもが門前の桜の下にずらりと並んで、施しを待っており、また、名物のあべかわを売る野天店が縁台を運び、赤毛布を敷いて桜の木々の間に客を引いていた。

だが、夕がたがくるとみな店をたたんで引き揚げのしたくを始めてしまった。というのは、お寺が町並びと遠く離れたへんびなところにあるから、それにつじ切り、追いはぎ、野盗のたぐいが出没するので、夜まで残っておるものはいしてないのであった。

野村が門前の桜の下をぶらりぶらりと嘆賞しながらやつてく

るころは、野天店の引き揚げと家路を急ぐ参詣人とで、かなり野村の気持ちとは違った気分を構成していた。

ボーン、ボーンと鐘が鳴りわたっている。

広い境内には桜が満開で、人々がバラバラと帰ってくるころだった。かがかきがじろじろと帰りの客人を待っているらしく、ひよつとこづらで荘厳な境内に目をくれていた。

古風な荘厳な寺院からは一種いまいわれない崇高な気持ちが、野村のえりをひとりでに正させずにはおかなかった。

そのとき。

——けんかだ！ けんかだ！

という声が、待っていたといわんばかりに響いてきたのであった。人々は寺院の門前のほうへ駆けていく。そして、かがかきが野村の肩へぶつかりながら飛んでいく。ありそんなことだと思ひながら、遠巻きにした黒山の肩と肩の間から野村がふと顔を出すと、

「あの酔っぱらいの旗本の若侍たちのことだから、きつとこんなことになるだろうと思っていた」

「どこの祭りにもやって来て、きつと、けんかを売らなきゃおさまらない連中なんだから」

野村がのぞいているとは知らない町人たちは、ひそひそと語りあっている。その町人たちに、よほどいやがられている旗本の名取りのごろつきらしい若侍、みんなあらひ紺がすりの着物をき、赤い酒気を帯びた顔をして、もう、きらきらと光る大刀をぶらさげて、ひとりの浪人に切ってかかろうとしていた。浪人は着流しの紋付きに角帯を締めて、ニヤニヤと笑って、ひとりの震えおのいている女と、美しい娘の子とをかばうようになにやら語らっておった。

「あの女に若侍がふざけた。すると、来かった浪人が女をか

ばって、若侍とけんかになったという寸法じゃなあ」

野村のこのことばに、町人肩越しに振り返って、

「そのとおりです」

と、恐縮したように首をすくめた。浪人は大きな額にびんの毛がからみつき、色の黒い、恐ろしいまなざし、大酒癖のためくちびるがいくぶんゆがみ、不敵なつら魂を持っておった。震えてる女にかばわれた美しい女は、町人の娘の姿はしておるが、顔には高雅な気品が現われ、目は黒く澄んでりんとして、どことなくゆいしよある家の出らしかった。

若侍は四人であつた。紋付き羽織ではかまのものもちをとり、そのころはやりの小倉の白い太い鼻緒はなぞのげたをはき、江戸市中をわがもの顔に横行している旗本道場の門人のようであつた。

ギラギラする大刀をふりかざして、けんか慣れのした口調で旗本気質をまる出しにして、

「素浪人まいれ！」

と、構えているのであつた。

浪人は灯籠とうろうの陰に女をていねいに入れ、微笑を漏らしていたが、くるりとこちらを見たときの目は、まるで別人であつた。

懲らしてくれるといったような小じわをまなじりに寄せた。スーッと進んだかと思うと、イノシシのように白刃の中に突入していった。四人のやいばを上へ払って、これをさらに横になぐりつけると、ぼろぼろともろくも若侍は刀を落として、さらに落としたやつを体当たりで突きこころばして、落とさぬやつを峰打ちで、下へ体をこごめたかと思うとひざを打つのであつた。目にもとまらぬ早さで四人を、あまり傷をさせぬ程度にやっつけた浪人は、ゆうゆうと刀をかざして、

「ほこりがついたわい」

と、群衆のほうを見て、微笑に似た寂しいひとりごとをいった。

浪人は女と娘を門前に待っているかごかきに渡して、自分もあとからかごに乗って、娘のかごを見守りながらついていくのであつた。三丁のかごは群衆をしり目にかけて、どんどん行つてしまふのを、ひとり感心したように野村は浪人を見送つておつたのだつた。

ボンと鐘が鳴って日が江戸城のかなた、武蔵野にとつぷりと暮れかかつていた。

二

三丁のかごは尾張町を過ぎ、江戸城の堀のはたのアシ原を足早にゆられていくのであつた。

堀はたの柳が夕がたの風にゆらゆらと揺れ、初芽のにおいが浪人の鼻をついていた。浪人はかごにゆられ、下げ戸をあけて、城の上を舞うカラスをながめていた。白い雲にいくぶん赤みの夕焼けがささっていた。

「雨かな？」

「だんな、雨がこうなくっちゃ、火事がまた思いやられます」

ひとりごとのようにいった浪人のことばをとって、かごかが息をハーハーさせながら答えて、春めいた空を江戸城のほうへ首を向けた。

「火事は江戸の花じゃ。でも、雨が降らにゃ、そちたちのかごがはやらんじゃろう」

「恐れ入りました。うがつたおことばでございます」

かごが霞が関の曲がりかどまで来たとき、前のかごがびたりと止まり、中から女がすそをつかみながら現われて、ていねいに浪人に話しかけていうのだった。

「さきほどは嬢さまの危ういところをお助けくださいましてありがとうございます。また、わざわざお送りくださいまして、お礼の申し上げようもございません。ここまで来れば、もうだいじょうぶです。いずれ、あらためて伺いたいという存じます。お所、失礼ながらお名まえなどをお教えくださいませ」

娘もかごからわざわざ降り立って、美しい顔に微笑をよせて、恥ずかしそうにうなじを下げるのだった。桃割れに結うた髪に赤いサンゴの玉が光っていた。

「奇しきことでござった。では、いずれめぐりあうこともござろう、これで拙者はお別れいたそう」

「さようなことをおっしゃらずに、お名まえのほどをお聞かせください」

と、女はつめ寄ってきた。

「うん、築地輕子橋を渡った浪人屋敷で、新納鶴千代といえは知っている人もござろう」

女のうしろから娘はうなじを下げるとき、横目にちらりと浪人を見て顔赤らめるのだった。

にいろさま！

つるちよさま！

娘はほんのりと抜け出たえり首をうなだれて、何度も浪人の名を繰り返しているようであつた。新納はかごに揺られながら微笑を浮かべていた。かれの目の先に、美しい絵から抜けて出たような娘の顔が浮かんでくるのだった。

「こりゃ、わしはあのおなごの名をききたかつたが、あつかましいように思われてききそこねた。なんという名かあててみい」

「だんな、めっそうもない。顔だけじゃ、わつちたちになつて

名は判断つきませんや！」

と、かごは笑いだした。

「こりゃ、そんなに急ぐな、かごが揺れて話ができんわ。夜におそいはいない身そらじゃ、ゆっくり行け……さあ、さあ、おおよそのところでけつこうである。なんていう名かいうてみい」

「へへへへ、まずお菊でげしょうな」

「お菊……？ お菊などとは下卑た名じゃ」

「だんな、花の中じゃ菊が一番でげしょう」

「そう申すなら、菊は菊でもいいさ。でも、そちたちはあのおなごを町人の娘と見るか。姿は町人の姿をしているが、あれはわしの目には、ゆいしよある名門のなれの果てと見た。菊姫とするがよからう」

「菊姫……？」

「姫と呼ぶのは過分というのか？」

「どういたしまして、とても、たまりやせんわ。あの女がだんなの顔をちらつと見たときには、わつしはふらふらとしてしまいましたよ」

「それがしもふらふらとしたというのじゃ」

「へッ、あやかりたいもんでござんす」

「うらやましがるな、あのような美しいおなごが、わしのよう

に恐ろしい形相の男に懸想すると思うか？」

「どういたしまして、あの旗本の若侍をひとでにする手並みを拝見して、わつしらは胸がスーッとしました。まして、助けられている本人は、ほれずにはおられませんわ。だんな、いふんばいい、いふんばいい」

「いふんばいいとはなんのことか」

「心配無用という意味です」

そんな話をしているうちに、かごが新富町を過ぎて輕子橋に

かかつてきた。輕子橋は赤穂浪士が討ち入りで渡った今に残る有名な橋である。月が中天にかかり、春の夜はうるんで、どこからともなく新内の流しが通ってくる。

「おれのねぐらがすぐそこにある」

「ここが輕子の橋でけす」

「ふーむ、ここでもよろしい」

新納はかごかぬつくり降り立った。

「いい晩じゃなあ。見ろ、波に月が砕けているわ」

「新内の文句じゃねえが、月見るときの寂しさでけすな」

「ときにいくらじゃ……？ ま、まてよ」

と、新納はふところ手に腹巻きを探っていたが、しまったというように棒立ちになって、しばらく考えていた。

「ふーむ、さっきの果たし合いのときに落とした。これ、かごや、さいふを落とした……よし、わしの家まで来るがよからう」

「だんな、だんな、ようがす、ようがす」

顔見合せていた雲助は、

「だんなのようにわっちらの心持ちをうがったお武家を客にもったことは、一生の功德でござんす。いつ、助けていただけるかわかりません。だんなのようなおかたに徳を施しておけばよ」

「そうか？ どうじゃ、河岸まで乗せてゆかぬか、河岸へ行けば、顔のきく家もある。今夜は酒に酌婦をあてがうによって、それで帳消しにしてくれ。さあ、さあ、こういふときは、さばけて出るがわしの気持ちをよくするというもんだよ」

「がってん、おことはに甘えやしょう」

ふたりのかごかきは新納を乗せて、勇みたって走りだした。そして、新納鶴千代の乗り込んでくるのは白魚河岸の水茶屋で

あった。

白魚河岸は川筋を深川へ行く途上の歓楽境である。隅田川筋に引き手茶屋がずらりと並び、赤毛布の縁台には色とりどりのあんどんがともし、深川まんじゅう、かわらせんべい、あべかわなどを夜おそくまで売ってはなやかであった。この引き手茶屋とはすかいに宿場水茶屋が蛭々として並び、歓楽の三味線太鼓が聞こえてくる。そして、要するに退廃気分を現出して、富岡八幡より一時は盛況をきわめたといわれる。しかし、江戸の尾張町、日本橋の老舗の小僧たちがこの気分に浮かされ、病氣を持ちたり、墮落したりするものが多いので、とうとう遊郭は洲崎に追われたのであった。洲崎に越してからも、この遊郭は吉原と匹敵する盛大なものであるから、江戸のその時代の歓楽ぶりと色里気分が思いやられるのである。

新納鶴千代のかごは河岸茶屋一流の大樓である「琴仙」の軒に横づけになった。「琴仙」は諸国の浪人の隠れ場であり、密議場であり、尊王派、佐幕派のスパイ戦の行なわれる巢窟となつておった。その玄関にちらつと赤いすそをひきずって降りてきた遊女の顔にも、一種いうにいわれない殺伐と退廃の気分が現われ、それがまた、江戸特有の悲しいロマンチックな情緒を織り出しておった。

春のなまぐさい風が空を洗い、青い月の上をカリの群れが流れている。そして、夜もすがら、桜の花が散り、掛けあんだんの影を歓楽を追う武士、町人の行列がひっきりなしに過ぎていくのであった。

三

日本橋を渡った魚河岸一帯は、かなり人家が並び、日本橋は威勢のいい魚問屋がいっぱいあり、江戸の魚類を取り引きする

町人が、ここへはどんなはいりこみ、「網」という字をみな商号に使い、隅田川へは地方の千石船がたくさん錨を投げ込み、江戸でもいちばん景気のいいところであった。魚問屋のうちでも、「網代数衛門」「富網屋吉五郎」「網乃屋庄蔵」などの豪商はみな將軍家諸大名の御用商人で、豪勢をきわめておった。これらの「網数」「富網」「網庄」などの大問屋の取り引き商売の連中が、おのおのの問屋に肩を持ってなわ張りけんかをよくやった。

落語家の金語楼のおはこの小話に「將軍とタイ」の話というのが当時のようによく語っている。つまり、將軍が毎朝のごぜんに焼きダイを供える。將軍ともあろうものの朝食であるから、一匹のタイでは用意が足りない。おかわりを何匹も焼いておいて、それを候補にしておく。ご膳にのぼったタイは片側にはしをつけて、すぐその次のタイを持ってこさせる。つまり、われわれのようにタイの両側にはしをつけ骨までしゃぶり、それにお湯をかけてスープにして吸うなどということはない。將軍は片方にちよつとはしをつけるだけである。でも、食うか食わないかわからないけれど、何匹も候補をこしらえておかなければならないのである。ところが、ある日非常にタイのとれが悪い。それでもやつと一匹を焼いて將軍の膳にまにあわせたと。ところが、その日にかぎって、將軍は片側にはしをつけ終わってから、「お代わり」を請求した。そのお代わりのタイが焼いてないのである。近臣の恐懼ひとかたではない。実にうっかりすると賄方は打ち首か、出入りさかな屋は取り引きご免の命令か、近臣は震えあがっていると、庭にカラスが飛んできた。將軍は小姓をかえりみて、

「あれはハトか？」

「御意、仰せのようにハトにござります」

といいながら、その小姓はさらの上のはしをつけたタイをくるとひっくり返したのである。

「うーむ、ハトか」

といいながら、將軍はそのはしのついてない、ひっくり返されたタイを食べて満悦したそうである。

こういう落語の一口話に現われるように、將軍や大名などのお好みのさかなが一匹でもなかったら、魚問屋は取り引き禁止となるのですからたいへんだった。明石町に船がはいると、大問屋と大問屋がさかなの奪い合いをし、小買い商人がおのおのの問屋のためにけんかをするのも、考えられないことではない。

網代数衛門はこういうなわ張りけんかの用心棒を養成のため、築地川べりの町内の所有地へ、浪人長屋というのを建築したのであった。そして、無料で浪人を住ませたうえに、三度の食事でまかなってやっておった。その浪人長屋が、軽子橋を越えた「網数」の店を横にそれた川べりに並んで、一種異様な気分をみなぎらしておった。ここにいる浪人は、尊王派でも佐幕派でもない。ルンペン侍というやつである。つじ切りをやつてこづかいをかせいでいるのや、流しをして歩いてるのや、祭りのあるごとに店を開く剣道見せ物師などが多く住まい、酒に酔いぐずれ、だらしのないところへ大小を二本ぶっこんで、うろろしている手合いだった。それゆえ、人通りなどまるつきりない浪人街だった。物騒きわまる侍が、月代を伸ばしほうだいにしてのそのそ歩いているつきりであった。しかし、養っているご本尊がひとつところだったから、仲間げんかはめつたになかった。浪人街気質というのがおのずから醸成されていて、今でいえば金持ちに買われている暴力団というたぐいの、仲間道徳と同じようなものを持っていた。

手を胸に組んでうなだれた新納鶴千代が、浪人街へのそりと

現われた。かれは何か思案にくれるように、自分の家の軒の前
 を行き過ぎてから、ハッと気づいたようにあとへもどってガラ
 リと戸をあけた。あけると、土間、六畳が一間あるつきりであ
 る。台所では、網代屋からおさがりの米と、みそと、さかなを
 ブツブツと煮ていた仲間の半七が、フーッと湯気の上るなべを
 上げて座敷へ上がったところで、くるりと振り向いてニコニコ
 しながら低能らしいのっぴうずな額の下の目をいっそう小さく
 して、そっ歯を出しながら、

「先生、腹が減ったでしょう。いいあんばいなところへお帰り
 でげすな」

と迎えた。いつもきげんのいいあるじが、きょうは腕組みし
 たまま、座敷へぶらりと上がって、床の間の柱へ背をもたせて
 考え込んでいる。半七は、いつも新納がおこったこともなく元
 気がいいのは、半七自身のユーモアの性格がそうさせるのだ
 と、ひそかに自慢しているような男だけに、あるじがふさぎ
 こんでいるのを見ると、かれも気をもまずにはおられないよう
 だった。

「先生、これはまたどうしたんです？」

「なんでもないではないか」

「変わったことはありませんか」

「変わったことはない」

「へえ」

「こりゃ、わしの飯をつけるまえに、酒を一本つけてくれぬ
 か」

「酒？」

と、盛りかけた飯の手を離して、半七はあるじを見守った。

「酒はないのか？」

「へえ、あります」

「その酒を持ってこい」

「でも、火でも入れにゃならぬしたみ酒で、先生には失礼で出
 せぬような気がしますが」

「それでぞんぶんじゃ」

「でも、買ってきましようか」

「ううむ、金があるなら買ってこい」

「チェッ!!」

と半七は額をたたいて笑った。

「うーむ、ないか、わしも文なしじゃ」

「なんだって先生、きょうにかぎって禁酒の誓いを破ろうとい
 うんでげしょう。二、三日まえなら、清酒の生一本が、先生の
 前で波を打っていたに、召し上がれとあれほどいっても、そん
 ときは手を横に振ってさ」

「度を越して酒乱の癖が始まるのを恐れてのう」

「ほんのちいっとべえなら酒は養生！」

「いいから、酒をつけろ」

「へえへえ」

半七は戸だなをあけて、一升どくりを持ち出し、台所へ降り
 て行き、主人が禁酒の誓いを破るのが解せないというように小
 どくりへ酒をついだ。

「半七、きょうは来客はなかったか？」

「客なんか薬にしたくありません」

「ふーむ」

「で、いったい、客があるわけなんですか？」

「もう、あってもよいはずじゃ」

新納は腕を組んで、ぼんやりと、おととい本願寺の永代経の
 おり救った美しい女のことを考えていた。

「こりゃ、半七、人には恩というものが感ぜられぬものかな」

「恩を感じないものがありますかね?」

「あるかもしれん、わしなども感じないかもしれない、だが愛は感じられる」

「先生、きょうは不思議ですな」

と、半七は振り返って、いつもとは変わった主人をまだ不思議そうに見守っていた。

「いや、わしも不思議じゃ」

「えい、めんどくせえ。少しぬるいが、こう頭のせんがゆるむと、せっかくの酒のおいが消えっちまう。さあ、一杯やりやり、先生のどうやらためになりそうな話を聞きましょうかな」

「ははははは、わしは頭のせんがゆるむように飲むのじゃ。もってこい!」

新納はぐらっと杯を起こすと、とくりをさげてきた半七の前へ突き出したのである。半七がなみなみとついにくれた酒を、パァとくちびるのいっばいに持っていきながら、

「ああ、久しぶりの酒は、涙の出るほどまいのう。涙が出て杯がいっぱいになればいいが、どうやら、とくりの底は豊富ではなさそうじゃな……さあ、飲め!」

「へえ……わっしのように毎晩ぐらっているものには、こういう酒はありがたくなえんで。もう、舌がバカになっていましてな」

「それでいいのじゃよ。おれのように、うさ晴らしに大酒を飲むものは、人間としてつかみどころのない証拠である。養生に酒を飲むそちは見上げたものだよ」

半七のグウッと飲み干した杯を受けて新納、ペロリと杯の底をひとため、なにしろ「升」を柙にせなきやらぬふたりの前に、一升とつくりの底にある酒はものの五分ともたないの

だった。半七はあるじに酒をついでやってから、とくりを振りながら、

「ええ、お軽いな」

と、嘆息している。そのとき、表にあたって、

「ごめんなせえ」

という人声がした。そして、ふたたびその声が、

「ごめんなせえ」

「だれじゃな。ちくしょう、門ちげえかな」

と、半七ぶつぶついっていた。

「半七、客はわしの家じゃ、薬にしてはどうか」

「やい、やい、いつまでも外に突っ立ってねえで、中へはいりやがれ。臼でついて粉にして、薬に調合してやるわ」

「ごめんなせえ」

と、戸をあけてのぞきこんだのは、新納をおととい乗せたかごであった。

「おれの家か?」

と、半七は来客などがあるというのが不思議でたまらないようだった。

「半七、ことばを慎め。戸をあけてはいつてきたものに、おれのうちかとは何をいう。さあさあ、やあ、かごや、おとといはご苦労じゃった」

「お武家さま、どうも先日は」

と、腰を低くして手をもじもじさせて、

「おい、吉、中へはいれよ」

と、外へ呼びかけている。

「なんだ、これは墨に吉じゃねえか。このとうへんぼくめら、なんだって来たんだ」

半七は大喜びで立ち上がって騒ぎだした。